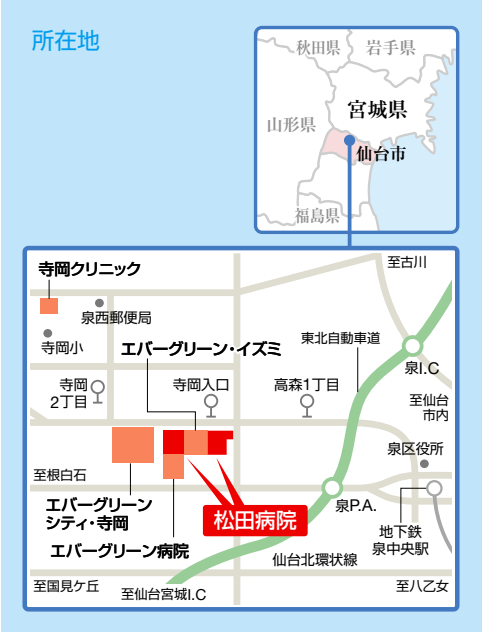
医療法人 松田会 松田病院

『日本一安心で感じの好い医療・福祉サービス』を掲げ、地域とともに歩む松田病院

編集委員　井桁 嘉一

松田病院　外観



医療法人松田会松田病院(理事長 松田倫政先生)は、仙台市の北部に位置するベッドタウン「泉パークタウン」の中にあり、今も拡張しているベッドタウンの中核病院としての役割を担いつつ整形外科に特徴のある病院として地域に密着した医療を広く提供している病院です。病院グループは、松田病院を中心にして開業以来地域の発展とともに大きくなり、「東北股関節疾患センター」、介護老人保健施設「エバーグリーン・イズミ」など17の関連病院、関連施設より構成された医療グループで、この地域になくてはならない存在となっています。

病院内ではMR装置「APERTO Inspire※1」、X線装置「EXAVISTA※2(FPD方式X線テレビ装置)」、ポータブル回診車「Sirius※3 130HP」などをすでに導入していただいており、これに加えて医用画像システム「WeVIEW※4」と画像診断ワークステーション「NV-1000」を導入し、お使いいただいております。松田病院では、2011年3月11日の東日本大震災時には幸いにして大きなダメージを受けることなく、停電等の復旧後はほどなく通常診療を行うことができたとのことです。

今回は完全フィルムレスに移行したシステムの採用から運用後の状況について、佐竹技師長はじめ佐藤事務局長、渡邉教育部部長にお話を伺いました。

○はじめに松田病院とシステムの選定、使い勝手について佐竹直也 技師長にお聞きしました。

井桁：はじめに松田病院の設立から発展の概略についてご紹介ください。

佐竹技師長：1982年に19床の外科・整形外科の医院として開設されました。それ以後2回の増床を重ね、関連の介護老人保健施設、脳外科クリニック等17の施設からなる松田会として今日に至っており、その中心であるこの松田病院は、現在125床(急性病床77、回復期リハビリ病床48床)、関連施設を合わせると650床の病院ネットワークになっています。その中に『東北股関節疾患センター』という施設があり、整形外科とリハビリセンターに特長がある施設です。また、病院の在り方として他にないコンセプトは、『いつも、"心"にクレド*』を持ちながら患者さんへのより良い医療の提供を目指しています。

(＊「クレド」とは、「信条」をあらわすラテン語)

井桁：現在は画像システム「WeVIEW」と画像診断ワークステーション「NV-1000」を使われていますが、画像検査科の立場からはどのようなところに気をつけて選定をされたのですか。

佐竹技師長：2008年のフィルムレス化に寄与する医療費改定を機にフィルムレス化へ踏み切る決心をし、一年をかけて

選定を行いました。従来、病院にはPACSが在りましたが画像保存が主な目的で診断にはフィルム出しを行っていましたので、フィルムレス化にはいくつかのポイントが有りました。まず、システムの条件として、

(1) 日本語対応であること
(2) 機能がシンプルであること
(3) 保守体制がしっかりしていること

この3つの基本的な条件を満たし、合わせて使い勝手を含めた検討を行いました。

井桁：そのような条件で、今回の画像システムを採用いただいた重要なポイントは何でしょう。

佐竹技師長：今回はシステムを採用するにあたり現場の人間が使いやすいことが一番であり、日本語表示であることはそこからきています。機能については、さまざまな部署で使用することを考えると複雑な作業は行わないので、シンプルに使えること、プログラムは端末へのインストール作業が不要であること、そして保守体制が地元にあることが大事でした。また、フィルムレス運用でDICOM/8 bitsJPEGの両方での運用がその場に応じてできることなども「WeVIEW」システムを採用するポイントとなりました。

井桁：一日の検査数は何件くらいでしょうか。

佐竹技師長：現在一日あたり、80から100件で、病院の性格からその7、8割はMR検査も含め整形領域になっています。

井桁：フィルムレスを実現されて、実際業務にはどのような変化がありましたでしょうか。

佐竹技師長：まず、フィルムレスへの移行は大きな問題もなく順調に行うことができました。実際に運用を始めるとシャウカステンが不要となり、画像の配信は、医師の使用用途によりDICOMデータ、あるいは参照として電子カルテ端末で見る場合には8bitsJPEG画像で配信し、ネットワークの負荷も軽く運用が楽にできています。合わせてクライアントの追加についてはWEB対応であることから端末増設も容易に行え、快適に使っています。

効果としては、もともと電子カルテの運用のもとPACSはありましたが、画像保存用として使用していて、モニタ診断は行っていませんでした。今回のWEB対応「WeVIEW」を電子カルテと連携させることによりフィルムレスとペーパーレスが実現し非常に良い環境が整って、画像参照までの依頼医の待ち時間短縮や画像検査科の作業時間短縮など、診療効率が上がっています。画像検査科では、フィルムを各科に届ける必要がなくなり、フィルムを探す手間などがなくなるなど業務改善に直接役立っています。今もフィルム出しはわずかに残っていますが、以前フィルムを保管していた倉庫は別の目的で有効に活用しています。さらに当時の保存倉庫は屋外の離れた場所にあったので寒い冬に取りに行かなくても良くなり、スタッフは相当楽になったようです。また今まで連携していなかった松田病院関連のエバーグリーン病院との間のネットワークを使ってWEB配信による画像連携に繋げることができました。

井桁：仕事の改善に役立っている点を具体的にありがとうございます。使っている皆様方の声はいかがでしょうか。

佐竹技師長：日本語表示で分かりやすいのと、アイコンが分かりやすくできているので直感的に使用でき、先生方からの質問も少ないですし、外部から来られる先生もすぐに使えるので好評です。

井桁：病院の連携や院内でのスムーズな運用に役立っているとお聞きし安心しました。今後の展開等についてお考えをお聞かせください。

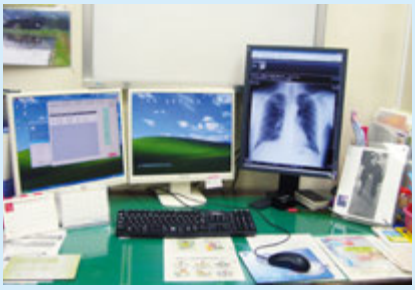
佐竹技師長：安定した稼働の継続と、やはり今後はシステム同士の連携が密になることやそれを患者さんへのサービスに

佐藤 勉 事務局長

渡邉好孝 教育部部長

佐竹直也 技師長

EXAVISTA


WeVIEW

APERTO Inspireとスタッフの皆さん

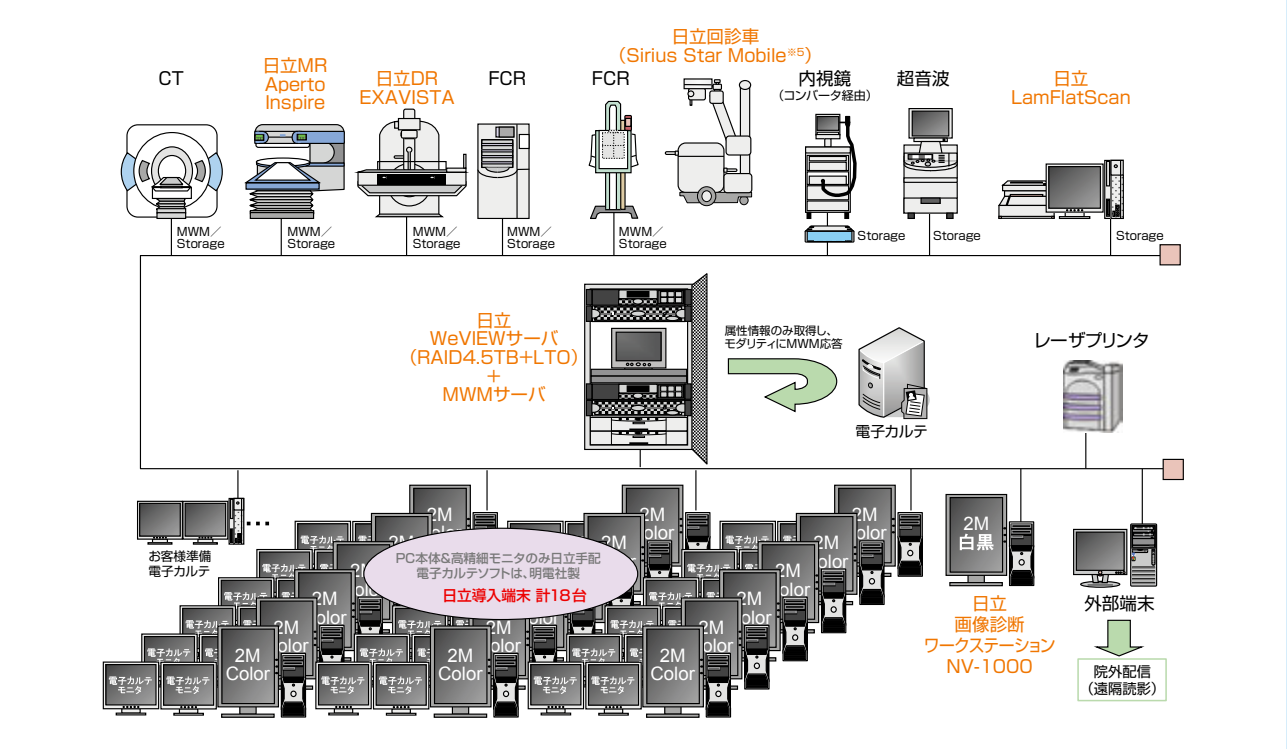
結び付けていくことがテーマになると考えています。
井桁：システムの高度化や安定稼働について責任を持ってご協力できるように心がけていきます。

○システム選定にあたって、病院運営の観点も含め、佐藤 勉事務局長にお聞きしました。

井桁：システム導入にあたって病院としての方針をお聞かせください。
佐藤事務局長：2008年のフィルムレス加算の医療費改定を機にフィルムレス化を行うこととしましたが、実は1999年に本院の新築にあたっての設計方針として既に「ペーパーレス／フィルムレス」を念頭にした設計を行っていました。そのためフィルム倉庫やカルテ庫は当初の設計に入っていませんでした。その後増築を進める中、2003年に電子カルテを導入しペーパーレス化を先に実行しました。今回は当初の設計の姿を実現すべく検討したことになります。今までもPACSはありましたが、運用的には当初の理想の姿に至っていなかったので待望のフィルムレスでした。選定にあたっては一年かけて4～5社を検討し、最終的には現場の意見を尊重して現在のシステムに決めました。
井桁：稼働後の運用についての評価はいかがでしょうか。
佐藤事務局長：当初の目的であったフィルムレス化が実現し、全体の運用として「ペーパーレス／フィルムレス」が実現しました。予想通りの効果が出ていると感じています。また、それまで大変な苦労もあった画像検査科からは大いに喜ばれているのはもとより、他科からの意見も好評です。スタッフの利便性が増し仕事の効率も上がっていると思います。またフィルムにかかっていた支出がなくなり、コスト削減にも大きく寄与しています。電子化は以前より理事長の強い思いがあり、今回ペーパーレス／フィルムレスが実現して満足しています。病院にとって電子化を行うにはコストが多くかかるので大変大きな改革になります。しかしながら運用上はもう以前の状態には戻れませんね。
井桁：今後を見据えての方向性についてお考えをお聞かせください。
佐藤事務局長：松田会は関連施設が多く患者さんの行き来もありますので、患者さんが関連施設のどこで受診しても患者さんのデータを確認し診察してくれるという安心感を持っていただくため、グループの病院間でのID管理、画像データ管理を一元化し連携を行うことです。またその先として、患者さんが自由に自分の画像を見られることなどをサービスとして提供できるような患者さんにとっても良いシステムにしていこうと思っています。
井桁：日立メディコはWEB型の電子カルテがあること、また複数のソフトを動かす時の患者さんのIDを同期させるなど、連携にお役に立てる技術がありますので新たなご提案ができ、ご相談に応じられると思います。
佐藤事務局長：いろいろ将来に向けたシステムの提案をしていただきたいと思います。
井桁：当初の設計からペーパーレス／フィルムレスを想定した先進性やその実行力をお聞かせいただきありがとうございました。

○病院運営として“クレド”を掲げている進んだ施設について、渡邉好孝 教育部部長にお話を伺いました。

井桁：病院に入ると普通の病院とはちょっと違ったとても明



システム構成図

るい感じを受けました。その辺りについてお伺いできますか。

渡邉部長：松田病院は、「地域を大切にし、地域とともに育つ病院であること、医療で地域に還元して行きましょう」ということを大切にしています。医療の知識、技術を提供するのは当然の基本として、例えば『レントゲンを撮る』ことについては、“いい画像を撮る”ために患者さんに多少の無理をお願いするようなこともあると思いますが、無理をさせないでいい画像を撮るのはどうしたら良いかを常に考えるスタッフでいたい。また患者さんに『ちょっと痛かった』と言われるような撮影ではなく、『楽でした』と言っていただけるような撮影ができたらいいなとか、この先生に会えて良かったと思っていただけるような病院を目指したいというのが求めていく一つの姿です。

井桁：そのためにどんなことに取り組まれているのでしょうか。

渡邉部長：すべてのスタッフがそれに向かってやっていきましょう。全員一緒にやろうということで取り組んでいます。この十年で実りつつあり、患者さんからも病院スタッフが挨拶されるような形になってきました。今取り組んでいるのは、毎月全員が受ける『学び続ける松田会』という勉強会があり、そこで他職種と合同で他業界の改善の取り組みビデオを見たりすることで『気づきを高める』勉強会を継続して行っています。他業界の取り組みを勉強することで、お客様の気持ちに近づくことができ、自分たちに役立つことが多いです。また接遇の専門家に毎月病院へ来ていただき、全員が順次受講し、ゲスト(患者)が喜べること、互いが喜び地域が喜んでくれるような松田会になることを目指しています。ISO取得や病院機能評価とは違った尺度で病院と職員自身の向上を心がけて取り組んでいます。機能的な満足度だけでなく情緒的な満足度も上がるように取り組んでいきたいと考えています。

井桁：ビジョンを継続していくのは大変なことと思います。

渡邉部長：未来を自分で考えていくこと、人に言われることでは続かないのでじっくり考えて実行することで『あれ、去年と比べると違うよね。』とふと感じるような、ゲストの声が変わってくることで見えてくるものがあると感じています。各自が“クレド”をいつも携帯し、事あるごとに触れたり、見直したりすることも行われています。年に一度投票によって年間で一番接遇の評価が高かった人の表彰なども行っていて、賞品は海外旅行を出したりしています。スタッフの誕生会も毎月実施し他部門の人との交流も盛んに行い、組織に偏らないコミュニケーションがよくできることもプラスになっていると思います。

井桁：皆様のゲストに対する接し方が暖かいことは今日廊下を歩いているだけでも感じることがあり、その理由がとても良くわかりました。ありがとうございました。

今回、松田病院を訪問させていただき、優しさに包まれた病院の雰囲気とスタッフの皆様の暖かさを感じることができました。そのような中で当社のモダリティや画像システムをお使いいただいている状況、「ペーパーレス／フィルムレス」をトップダウンで当初より計画設計し実現に向けてご努力され、それを実現されている実行力に感銘を受けました。止めてはいけない病院の動脈としての“システム”についての責任を改めて強く感じました。地域とともに生きるメーカーとして、われわれもきちんと動くシステムを提案することはもとより、人に優しい『ユーザフレンドリー』なシステムを目指し、“クレド”を実現する一部として今後もご協力させていただきたいと思います。本日はお忙しいところお時間をいただき大変ありがとうございました。

※1 APERTO、APERTO Inspire、※2 EXAVISTA、※3 Sirius、※4 We-VIEW、※5 Star Mobileは株式会社日立メディコの登録商標です。

Sirius 130HP

クレドの携帯冊子と研修記録

画像検査科の皆さん

インフォメーションとコンシェルジュの皆さん

受付窓口

筆者(左)と東北支店 菅原主任(右)